The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	十津川流域の可能表現
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大日本語研究. 1992, 4, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10283
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

十津川流域の可能表現

Potential Expressions in the Totsukawa Basin

渋　谷　勝　己

SHIBUYA Katsumi

キーワード：可能表現，体系化，伝播，威信

は　じ　め　に

本稿は，大阪大学文学部社会言語学講座が，1986年および1987年の両年に行った十津川流域（和歌山県新宮市―奈良県御所市間の26地点，南北約90km にわたる）言語調査のうちから，可能表現に関する項目（調査票番号では68から75）について報告するものである。

インフォーマントは，26地点について４つの年齢層（若年10～29歳，壮年30～49歳，実年50～69歳，高年70歳～）から各１名ずつ生え抜きの方を選んだ。性別は問うていない。

本調査からの報告には，すでに「ガ行・ダ行子音」に関する真田・尾崎（1988），「アクセント」に関する真田・尾崎（1989），同（1990），「否定表現（動詞「行ク」と「来ル」についての状況可能否定を含む）・命令表現」に関する真田（1989）があり，さらに「アスペクト」や「語彙」に関する報告書が準備中である。調査の概要については真田（1989）が詳しいので参照されたい。

1.「可能」の調査項目

調査の対象は以下の項目の下線部に対する表現形式である。

（68）　この子はもう一人で着物を<u>着ることができる</u>

(69)　この子はまだ一人で着物を着ることができない

(70)　私はどんなむずかしい字でも書くことができる

(71)　私はそんなむずかしい字は書くことができない

(72)　この着物は小さくなったけれども，まだ着ることができる

(73)　この着物は小さくなったので，もう着ることができない

(74)　このペンはどんな紙にでも書くことができる

(75)　このペンはインクがなくなったので，もう書くことができない

これらのうち(68)から(71)までは動作主体の能力（この場合「着物を着る能力，むずかしい字を書く能力」）による可能・不可能をいう「能力可能」，(72)から(75)までは動作主体外の条件（この場合「着物が小さくなったこと，ペンの持つ性質や状態」）による可能・不可能をいう「状況可能」である。可能表現の場合には肯定表現と否定表現とで対応する形式が用いられない場合があるので，肯定・否定両形式を尋ねている。

2. 可能形式群

地理的な分析に先立って，調査によって得られた可能形式（動詞「着ル」（上段）と「書ク」（下段）について）をまとめておこう。共起する否定辞のタイプにも注目すれば，表1のように整理することができる。以下の図で用いる記号とともに示す。

記号は，個々の可能形式が同系列のものである場合（エル系・ヨー系など）には同系列の記号をもつように配慮した。たとえば助動詞（ラ）レル系の形式は線もしくは四角，可能動詞系の形式は点もしくはマルの記号を与えている。また否定辞についても，同じような配慮をして記号を与えている。表の「五段化（ヤ）＋ン」に？が付けてあることについては，**4.** で説明する。

以上の形式のほかにも，次のような混交形式が得られた。いずれも少数であるのでここでは数字でもって示すことにし，特別な記号は与えない。また否定辞についても特に区別しないで示すことにする。

ヨー系＋ラレル系　(1)：ヨーキラレル・ヨーキラレヘン

肯否＼可能形式		エル系	ヨー系	(ラ)レル系		可能動詞系	可能動詞+レ系
肯定形		※ キエル	△ ヨーキル ヨーカク	キラレル カカレル	キヤレル	・ キレル カケル	☆ キレレル カケレル
否定形	ン	※ キエン	△ ヨーキン ヨーカカン	キラレン カカレン	キヤレン	・ キレン カケン	☆ キレレン カケレン
	五段化(ラ)+ン		▲ ヨーキラン			キレラン カケラン	
	?五段化(ヤ)+ン		▲ ヨーキヤン	キラレヤン カカレヤン		キレヤン カケヤン	
	ヘン			キラレヘン カカレヘン	キヤレヘン	キレヘン カケヘン	★ キレレヘン カケレヘン
	五段化(ラ)+ヘン		▲ヨーキラヘン				
	ヤヒン			キラレヤヒン カカレヤヒン		カケヤヒン	
	ナイ		△ ヨーキナイ	キラレナイ		・ キレナイ カケナイ	

表１　可能形式一覧

ヨー系＋可能動詞系(2)：ヨーキレル・ヨーキレヘン・
ヨーカケル・ヨーカケヘン

ヨー系＋エル系　(3)：ヨーキエヘン

エル系＋レ系　(4)：キエレル・キエレン

また地点Ｄの壮年層のインフォーマントは，質問文(74)（図４）に対してカケレールと答えている。この形式は可能動詞＋レ系にさらにエルが付加したものかもしれない。エル系を含む混交形式はキエレルのようにエルが前部に立つのが一般的である点，この解釈には問題が残るが，一応ここではそのように考え，数字の「５」で示しておく。

図の〔－〕の記号は「その他の形式（キルコトガデキルなど）」を示す。

なお表で空欄になっている部分に該当する形式の中には，今回の調査ではたまたま網の目にかからなかったというだけで，実際には使用されているものがあるかもしれない。

以上のことをふまえたうえで，次に各々のグロットグラムを見ていくことにしよう。

3. 可能形式の分布

3－1 状況可能

質問文の順序とは異なるが，説明の便宜上，図1～4によって状況可能形式の分布状況から見ていくことにする。図1・2はそれぞれ動詞「着ル」と「書ク」の状況可能否定形式，図3・4はその状況可能肯定形式の分布図である。まず否定表現から見てみよう。図1・2からは次のような点が観察される。

(1) 一段動詞（図1，図3も）について，新宮から本宮にかけて（A—G）の地域と，西吉野・御所の一部（U・V・Z）で，補助動詞エルを後接させたキエル・キエンが用いられている。五段動詞にはこの形式はない。年齢的に上のインフォーマントから得られたものであり，また離れた地域にわかれて分布していることから，この形式はかつては調査地域一帯で用いられていたものかもしれない。この形式の国語史的な位置付けに関しては **5.** で考える。

(2) 次に，図2の，大塔から御所にかけての北部（R—Z）に見られるカカレヘン等，レル系可能形式＋否定辞ヘンの形は，単純否定にカケヘン，可能否定にカカレヘンをもつ大阪方言の形式が伝播してきたものである。この形式が用いられるようになる以前のこの地域では，地点VやXの高年層等のカケンが使われていたものかもしれないが，地点U・V・Wの高年層等のカカレンという形式がそれであった可能性もある。しかしこの問題について考えるには，まだ確認しておかなければならないことがあるので，もう一度図1にもどってまずキレン・キラレン・キヤレン・キラレヘンの関係について見ておこう。

(3) キラレヘンについては上のカカレヘンと同じように北部地域に分布しており，カカレヘン同様大阪から伝播してきたものと考えられるが，キラレンは図1において特徴的な分布を示す。すなわち南部（A—H）では

キラレンは主に高年層と実年層によって用いられる古い形式であるのに対して，中部（K—O）のキラレンは（その多くが誘導で得られた形式ではあるが）若年層・壮年層を中心に用いられる新しい形式であり，すでに存在する可能動詞系のキレンの分布の中に浸透しつつあるかに見える。

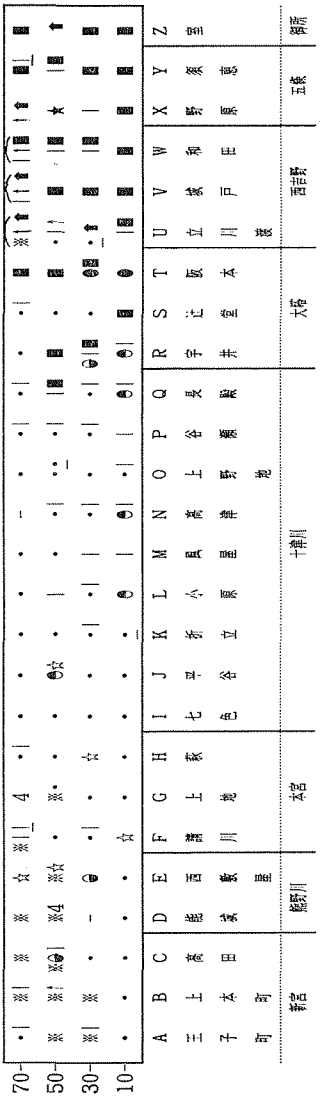

図1（73）「着ることができない」（状況可能）

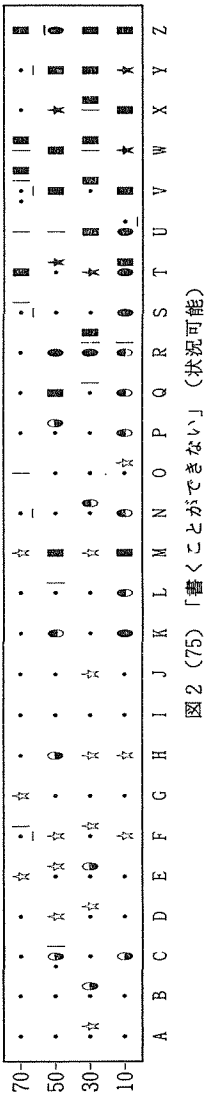

図2（75）「書くことができない」（状況可能）

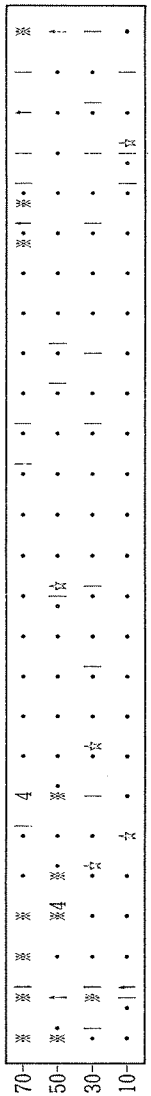

図3（72）「着ることができる」（状況可能）

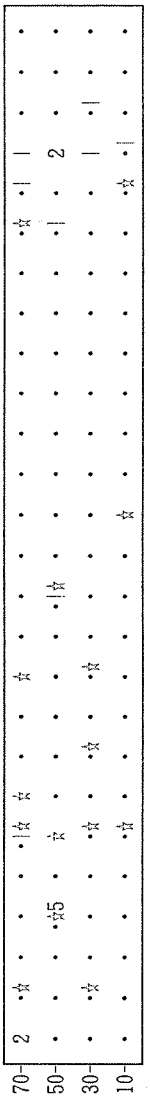

図4（74）「書くことができる」（状況可能）

このように図を読み取れば，北部（U—Z）の高年層によって用いられるキラレンおよびキヤレンは，かつてキラレヘンが勢力を得る前に用いられていた形式であると考えることができる。この両者の中では，高年層を中心に用いられるキヤレンのほうが古い形であろう。キヤレンはそもそもがキラレンから変化してきた形であろうが，キラレンが再度復活したのにはやはり大阪方言のキラレヘン（と全国共通語のキラレナイ）が伝播してきたことがあずかっていたと思われる。つまりこの地域では，否定辞ンをそのままにしてまずラレル系可能形式だけを採用したのである。ちなみにキヤレンがキラレンに「回帰」しているのはこの地域だけに限らない。同じように大阪方言の影響が著しい和歌山市周辺でも，このような動きが活発である（徳川・真田（1986））。

(4) 可能動詞系のキレンは，中部地域のどこかで，肯定形キレルや五段動詞によって形式的なサポートを与えられて生じた新しい形式ではないかと思われる。キレンが大阪から伝播してきた形だとは考えにくいというこ

とについてはつぎのような事情がある。すなわち，現在の大阪方言における状況可能形式の体系は，否定辞ヘンを用いる場合には肯定キレル・カケル／否定キラレヘン・カカレヘン，否定辞ンを用いる場合には肯定キラレル・カケル／否定キラレン・カケンが一般的で，これまでキレンという形式が普及したことはないと推定されることである。つまり，否定辞ヘンが成立した時期（明治期）よりも一段動詞から可能動詞が派生するようになった時期（昭和初期か）が遅いために，キレヘンという形式はあり得ても，キレンという形式はそれほど勢力をもったとは考えられないのである。

一方キレンは東部の海岸線から新宮・本宮と伝播してきてこの地域の中部で一般化したということも考えられるが，一段動詞の可能動詞は全国各地で独自に発生してきたという事実があるので，この地域だけ無理に伝播によってその発生を論じる必要はない。しかも新宮を中心に，南部地域の一段動詞の可能形式は最近までエル系あるいはラレル系のものが主だったのである。

問題は，現在その使用が全く見られないVからZまでの西吉野・五条地域で，かつてキレンが用いられたことがあったかどうかであるが，この地域では，ア）大阪方言で五段動詞の単純否定がカカヘンからカケヘンになったときに可能否定がカケンからカカレヘンに変化したのと同様に，単純否定に見レヘン（キレヘン）などを用いるようになったため（真田（1989）），この地域の可能否定もキレンからキラレヘンに変わったという可能性があること，イ）肯定形キレル（図3）および五段動詞の可能否定カケンという類推のためのひな型が揃っていること，ウ）五段化が盛んであること（4. 参照），など，かつてこの地域でもキレンが用いられたことがあるのではないかと推測させる材料がいくつかある。しかし，現在の高年層にキヤレン・キラレンはあるもののキレンがないことを考えると，それがどの程度用いられたかは疑問である。ここでは暫定的ではあるが，かつてはキレンがたまに用いられることもあったが，キヤレンのほうが一般的な状況可能否定形式であったと考えておこう。

以上，これまで述べたことを類型的にまとめると表2のようになる。

（古層	キエン・キラレン		キエン？	キヤレン）
高年層	キエン・キラレン	←キレン→	←キラレン	↑
実年層		←キレン→	←キラレン	←キラレヘン
壮年層		←キレン→	←キラレン	←キラレヘン
若年層		←キレン→	←キラレン	←キラレヘン
	新宮			御所

表2 状況可能否定形式の推移

(5) ここで図2の「書ク」の可能形式の問題にもどろう。すでに明らかなように，北部地域のカカレヘンが大阪から伝播する前に用いられた形式が何であったかについては，「着ル」の場合とパラレルに考えるわけにはいかない。それは，大阪方言にあった可能動詞系のカケンが伝播・定着していた可能性があるためで，もしそのように想定し，またその後のプロセスを「着ル」と同じように考えることができるとすれば，北部地域での変化は次のようになる。他の体系との併用ではあるが，体系Ⅰは地点Xの高年層に，体系Ⅱは同じく地点Xの壮年層に，体系Ⅲは若年層に見出されるものである。

カカレヘン・キラレヘン（大阪方言から）
↓　↓

体系Ⅰ	体系Ⅱ	体系Ⅲ
カケン →	カカレン →	カカレヘン
キヤレン →	キラレン →	キラレヘン
(	→	キヤレヘン)

この北部地域では単純否定イケヘンよりも可能否定イカレヘンのほうが急速に広がっているという指摘が真田（1989：18）にあるが，上の(3)でも見たように，（ラ）レル系可能形式と否定辞ヘンの間にも伝播の速度に違いがある。ここでは，大阪でイカレヘンのような形式を生み出したのとは異なる独自のメカニズムによって，大阪方言の可能形式を受容しているということができよう。

なお，地点K—Pにおける（ラ）レル系可能形式の使用状況は「着ル」と

「書ク」では異なり，「書ク」の場合その使用率が低い，という問題がある。これは，キレンとカケンの定着度の違いということに起因するものかもしれない。すなわちキレンはカケンに比べてその成立が新しく，まだ十分に定着していなかったために，威信をもつ別の新たな形式（(ラ)レル系可能形式）が伝播してくると，容易にその形式に道を譲ったものと考えることができるのである。以下で見る肯定表現（図3・4）でも，ともに復活したと思われるカカレルとキラレルでは前者のほうが使用率が若干低いということがあるが，これも同じように説明できる現象であろう。

(6)　次に，図3と4によって，状況可能肯定形式の分布を見てみよう。全般的に可能動詞系のキレル・カケルが多い中で，新宮側にキエル・キラレル・キヤレルが多い。このことについてはすでに述べた。一方LからZにかけての中北部地域にもキラレルとカカレルが若干分布するが，そのほとんどが否定表現にも同じ(ラ)レル系可能形式を用いている（逆は成り立たない）ので，否定形式との対応を求める体系化のメカニズムが働いた結果現れてきたものが多いと思われる。もしそうだとすれば，「可能表現には，ある形式が可能形式として採用される場合にはまず否定表現で始まり，また衰えるときには否定表現が最後まで残る」という否定優位の一般的な傾向があるのであるが（渋谷（1990)），この場合もその一般的な傾向に符合することになる。

(7)　最後に，図1から4までのすべての図に現れる可能動詞＋レル系の可能形式（キレレル・カケレルなど）について見ておこう。この形式は五段動詞「書ク」のほうに優勢であり，地域的には新宮・熊野川・本宮（A—H）にまとまった分布を見せるほか，各地に点在する。年齢的な偏りはない。

この形式と同じ形の形式は全国各地で見出されるものだが，一般に，(ラ)レル系の可能形式が用いられているところに可能動詞系の可能形式が侵入してきたとき，後者が前者よりも一拍少ないことなどが影響して両者が混交して生じることの多い形式である。この地域でもそのようなプロセスを経て用いられるようになったものと考えることができるであろう。一

方，五条など北部の地域ではそのほかに，単純否定のカケヘンの影響があるかもしれない。この地域に隣接する和歌山県橋本市周辺では，すでに，単純否定カケヘレン・可能否定カケレヘンという体系がかなり一般化している（徳川・真田（1986））。

3-2 能力可能

能力可能形式の分布図を図5から図8に示す。これらの図からは以下のようなことが読み取れよう。分布は単純なので，まとめて解釈する。

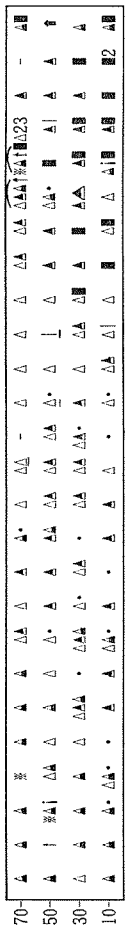

図5（69）「着ることができない」（能力可能）

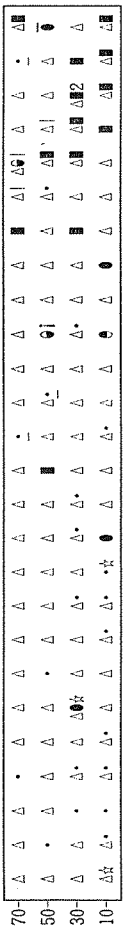

図6（71）「書くことができない」（能力可能）

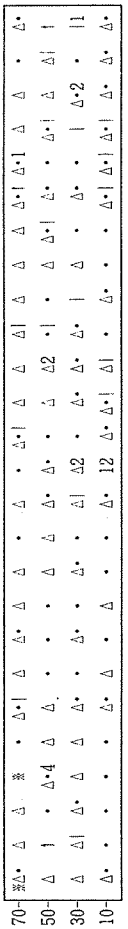

図7（68）「着ることができる」（能力可能）

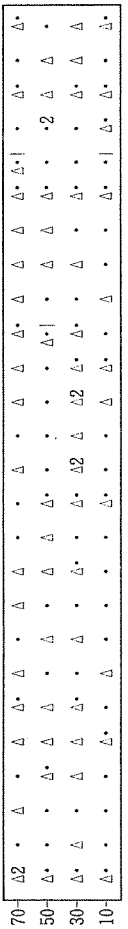

図8（70）「書くことができる」（能力可能）

(1)　関西のヨー系形式一般に見られる特徴でもあるが，ほぼすべての地点において，「着ル」「書ク」いずれの動詞についても，肯定表現よりも否定表現のほうにヨー系の形式が多く用いられている（前節の「否定の優位」ということを参照）。

(2)　肯定表現では，当該地点で用いられる状況可能形式と同じ形式が，若い世代を中心に用いられるようになっている。

(3)　また否定表現でも，若い世代を中心に，ヨー系形式から可能動詞系（新宮側），あるいは（ラ）レル系（御所側）に移行しつつあるさまをうかがうことができる。しかし大阪方言などに比べると，ヨー系可能形式はこの地域ではまだ安定しているといえるであろう。一般に能力可能を専門に表すヨー系可能形式は，全国共通語にその形式がないこと，全国共通語では能力可能・状況可能を形式的に表現し分けないこと，などを背景として，徐々に後退しつつある。

ちなみに上の(2)(3)で指摘した変化の方向性，すなわち状況可能形式が能力可能をも表すようになる変化は，過去・現在を問わず日本語可能表現一般に見られる傾向でもある（渋谷（1990））。

4. 活用語の五段化

本節では，本稿の直接の目的ではないが，一段活用否定可能形式の一部に五段化しているものがあるので，そのことについて簡単にまとめておく。五段化する形式については，表1，可能形式一覧を参照。また，真田（1989）の第7節も参照されたい。

今回の調査地域で五段化したと思われる形式が見られたのは，図9に記号●で示す地点である。五段化した結果（ヨーキラン・キレランなど）がさらにヤ行音化した（ヨーキヤン・キレヤンなど）と見られるものもあるので両者を区別して示す。またラ行音のヤ行音化現象がある場所の指標として，キヤレンなどが用いられる地点もあわせて示す。

図9からわかるように，ラ行による五段化は中部地域に著しく，ヤ行音化によるそれは新宮・熊野川・本宮（A—H）と西吉野・五条・御所（U

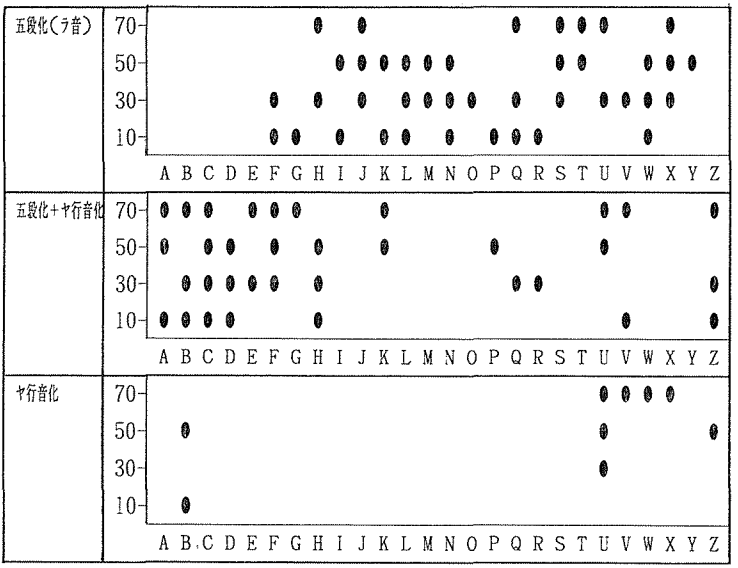

図9　五段化とヤ行音化

―Z）において著しい。

ただし，新宮側の「ヤ行による五段化」ということについては疑問がある。それは，ア）新宮から本宮にかけては命令形には五段化が起こらないこと，イ）新宮から本宮にかけての数地点で，単純否定に「MIYAHENのＨＥＮにＮが干渉した」見ヤンという形式が年齢層にかかわりなく多数見出されるが（真田（1989：24)），そのヤンを一つの否定辞と認めて生産的に用いた結果，ヨーキヤンのような形式が用いられるようになったと考えられること，など，五段化ということを否定する現象が見出されるからである。先に表1で可能形式一覧を示したときに，「五段化(ヤ)＋ン」にクェスチョンマークを付しておいたのはそのためである。上のイ）の現象は，ヨーキヤン等の分布に比べてキヤレン等の分布が非常に限られていることを説明する。しかし，ヨーキヤン（あるいは単純否定のキヤン）は多くあっても，なぜキレヤンなど可能動詞系のものにそれが少ないか（図1と図5を参照)，またなぜ＊カキヤン（＊カカヤン）という形が全く使われないのかということについては疑問が残る。前者については，キレヤンの

ようにもともとアマルガム的な形式の場合には語彙的伝播が遅れるということであろうか。後者の問題については，やはり五段化の存在を想定せざるをえないようであるが，今は思索の域を出ない。

5. 補助動詞エルの史的位置付け

最後に，新宮から本宮にかけて（A—G）の地域と西吉野等数地点（U・V・Z）で，高年層・実年層を中心に用いられているエル系可能形式の歴史的な位置について考えておこう。

補助動詞エルは，中古から中世にかけては京阪語でも口頭語として用いられ，江戸語においては近世にまでその使用の跡を追うことができるのであるが，現在ではすでに文章語と化してしまっている（渋谷（準備中））。

一方現在の方言においても，補助動詞エルが可能表現として用いられるのは，岩手の一部と中部地方，九州北西部など，その地域はかなり限られている。しかもそのほとんどがその使用を能力可能に制限されていることから，この地域（および和歌山県田辺市—徳川・真田（1988）参照）の補助動詞エルは，状況可能を表すという点できわめて特異な特徴をもっていることになる。

さらにこの地域の補助動詞エルについてもう一つ特徴的なことは，それが一段動詞にしか用いられないということである。他の方言ではカキエル・カキエンのように五段動詞でも用いられるのが一般的である。

さて，以上のような特徴をもつこの地域の補助動詞エルを，中央語の歴史と照らし合わせた場合，どのようなことがいえるであろうか。ここでは試論的ながら，次のような変化のプロセスを考えてみたいと思う。

(1)　補助動詞エルは，かつては状況可能だけではなく能力可能の意味をも担う形式として，五段動詞・一段動詞のいずれに対しても用いられていた。このように想定することについては，中部地方，九州北西部のエルの実態から見て無理はない。

(2)　そこに能力可能を表す形式としてヨー系可能形式が大阪から侵入し，定着する。

(3) また状況可能についても(ラ)レル系，次いで可能動詞系が伝播してきて補助動詞エルは徐々に衰退する。

(4) その過程において，五段動詞ではカキエルとカケルが音的類似性あるいは音的融合によってカケルに合流する。このことには，補助動詞エルが中央語で衰えていたということがあずかっていよう。一方一段動詞についてはその対応する可能動詞がまだなく，しかも母音が融合すればケルのような語幹が全く異なる形式が生じることになってしまうためにキエルという形がそのまま残った。

以上のように考えるわけである。しかし，このように考えるについては問題がないわけではない。たとえば，

(5) ヨー系・(ラ)レル系・可能動詞系の可能形式が伝播してきた相対年代がよくわからないこと。

(6) この地域(特に新宮側)ではほとんど使われなくなっている(ラ)レル系(ヤレル系)可能形式の歴史がまだ不鮮明なこと。

(7) 地域を転じれば，静岡などでは補助動詞エルと可能動詞とで意味の分担をしていること。

といった問題がある。しかし以上の問題を解明するためにはこの地域の可能表現を見ているだけでは不十分なので，稿を改めて論じることにしよう。

以上本稿では，十津川流域の言語調査の中から可能表現を取り出して，状況可能(**3-1**)，能力可能(**3-2**)を表すのに用いられる形式の分布を示し，それに解釈を加えた。また **4.** においては否定辞と五段化現象を取り上げて分析を試み，同じ形態をもつヨーキヤンが，新宮側と五条・御所側ではその形をもたらしたプロセスが異なる可能性があることを指摘した。また最後の **5.** では，この地域に特徴的な補助動詞エルについて，その歴史的な位置を考えてみた。

参考文献

真田信治(1989)「関西周辺部における言語接触の一斑—語法に関するグロット

グラムから—」『阪大日本語研究』1　大阪大学文学部日本学科言語系研究室
————・尾崎喜光（1988）「十津川方言音声のグロットグラム—ガ行子音・ダ行子音」『待兼山論叢日本学篇』22号　大阪大学文学部
————（1989）「十津川流域における1・2モーラ名詞アクセントの分布と変化」『音声言語』Ⅲ　近畿音声言語研究会
————（1990）「十津川流域における3モーラ名詞・動詞・形容詞アクセントの分布と変化」『方言音調の諸相—西日本—(1)』
渋谷勝己（1990）『可能表現の諸相と発展』大阪大学
————（準備中）「意味の縮小と文体差—可能の補助動詞エルをめぐって—」
徳川宗賢・真田信治（1986）「和歌山県紀ノ川流域の言語調査報告」『大阪大学日本学報』5　大阪大学文学部日本学科
————（1988）「和歌山県中部域の言語動態に関する調査報告」『大阪大学日本学報』7　大阪大学文学部日本学科

（文学部日本学科講師）